

第18回 東京外語会有志による海外支部歴訪の旅

～歴史・芸術・文化を堪能するウズベキスタン7日間訪問記～



2019.10.9 (水) ウズベキスタン支部との交歓会 (タシケントにて)

1995年に第1回の台湾訪問でスタートした同会は、これまで17カ国・19の支部を訪問してきた。第18回目となる今年はシルクロードの面影を濃く残す中央アジアのウズベキスタンを10月8日(火)～14日(月)の日程で訪問、9日の夜は20番目の支部訪問となる現地ウズベキスタン支部と交歓会を開催した。参加人員は訪問団19名、現地より6名の計25名であった。

今回の旅の特徴は、総勢19人の内12人が女性、しかも、ご主人同伴でない1人参加が11名、パリからの参加あり、一足先に出発して中国の西安を観光してきた女性ありなど、1961年卒から1993年卒まで様々な年代の女性が、若い頃からの憧れであったと言うシルクロードの観光、買い物、食事とお喋りに興じ、パワー満開だったことである。早朝出発が多いかなりタイトなスケジュールを老若男女全員、何とかクリアすることができた。

10月8日(火) 成田よりタシケントへ

朝7時15分成田空港に集合、特別室にて結団式を行い石原隆良幹事代表(D1956)がご挨拶、9

時15分発の大韓航空に乗り込む。

(注) 成田～ウズベキスタンのタシケント間にはウズベキスタン国営航空の直行便が就航しているが便数が少ないためソウル経由の大韓航空の利用となった。

ソウルにて二瓶美由紀さん(D1987)が合流しタシケントには夜の7時20分着。(ただし日本との時差が4時間あるため日本時間では11時20分着)

空港にて現地ガイドのアキバルさん(イケメンの中堅男性、日本語上手でツアーの最後までケアしてくれた)の出迎えを受ける。なお添乗員は前回第17回ミャンマー訪問時と同じ元気溢れる北山さん(女性)であった。(タシケント泊)

10月9日(水) 晴れ タシケント市内見学とウズベキスタン支部との交歓会

パリより参加の沼田睦子さん(F1969)が早朝に合流、一行はバスにて市内見学へ。午前にはバラク・ハン・メドレセとアブドゥールハシム・メドレセの二つの神学校を見学、今は神学校としては使用されておらず1階はいずれも土産売り場となっていた。午後は、日本

でも知られているナヴォイ・オペラ・バレエ劇場を見学、ここは捕虜となった旧日本兵が強制労働で造ったところで、1966年に発生した大地震にもびくともせず日本人の評価が再認識されたと言われている。



ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場

タシケントの市内は総じて中心街を歩いている限シルクロードの風情を感じることはない。地下鉄も3線走っている近代都市である。

夜は街の中心にあるレストラン「カラヴァン」にて6時からウズベキスタン支部との交歓会を開催した。

出席者は支部より6名。武村勝将支部長（大外大 R1998/JICA）、松本幸之助さん（R2016/日本大使館書記官）、特別参加として地元 JICA の高坂宗夫事務所長、加えて東京外語よりタシケント国立東洋学大学に留学中の3名中井優花さん（R3年生）、田嶋集輔さん（R3年生）、荒井みなみさん（Pr3年生）。訪問団は19名、東京外語会より石原隆良代表を筆頭に16名、咲耶会より加来洋二郎さん（大外大 C1962）を筆頭に3名、総計25名による賑やかな会となった。

司会・進行は武村支部長が担当、初めに石原代表のご挨拶、次に加来さんのご挨拶、続いて高坂所長の乾杯によりスタートした。またこの席にて日本から持参した東京外語会長谷川理事長並びに東京外大林学長か



交歓会で挨拶する留学生の荒井みなみさん

らのそれぞれのメッセージが石原代表より武村支部長へ手渡された。

ウズベキスタンの名物料理と現地ビールを堪能後、各人の自己紹介があり、現地の松本さんからは8月に着任したこと、3名の留学生からはそれぞれ目的をもって元気に勉強している旨の発言があった。留学期間は1年とのこと。訪問団からはパリから参加の沼田さんから参加の意義の話があり、最後に特別参加の JICA 高坂所長よりウズベキスタンの現況のお話をいただき、全員の記念写真を撮影した。（タシケント泊）

10月10日（木） 晴れ タシケントからヒヴァへ

早朝の出発となり、朝7時25分発の国営ウズベキスタン航空にて西に1,000キロ離れたウルゲンチ空港経由ヒヴァに向かう。ここはアムダリヤ川下流のオアシスの町で「古代オアシスと博物館都市」と呼ばれている。城壁が有名、外壁と内壁の二つがあり特に内壁内（イチャン・カラ）は観光の名所となっている。内城は高さ約8～10メートル、厚さ約6メートル、長さ約2.2キロとなっており、ユネスコの世界文化遺産として保存されている。



私達はこの中でイスラーム・ホジャ・メドレセ（神学校）とミナレット（尖塔）、カルタ・ミナル、ムハンマド・アミン・ハン・メドレセ（神学校）、ジュマ・モスクとミナレット（尖塔）をそれぞれ見学した。全体として日本の奈良と言えらるだろうか。（ヒヴァ泊）

10月11日（金） 晴れ ヒヴァからブハラへ

早朝、バスにてウルゲンチ空港へ。9時35分発のウズベキスタン航空にてブハラへ向かう。ブハラは古くからシルクロード上の要衝として知られ「博物館のような都市」と言われている。

到着後オアシスの池ラビハуз、ナディール・ディヴァンベギ・メドレセ（神学校）、交差点バザールのタキ市場、カラーン・モスク、カラーン・ミナレット（尖塔）、アルク城、イスマイル・サーマーニ廟等を見学した。夜はレストランにて会食時ウズベキスタンを象徴する豪華なショー（ファッションショーのようなもの）があった。



美しいウズベキスタンの衣装を着飾った男女による「シルク」誕生の経緯を表す内容であった。卵の誕生から糸への成長、さらにその糸を織りなす美しい絹の布になるまでの過程を数人の踊り子が糸を乱れぬ見事な踊りで演出していた。一時ではあるが日本のことはすっかり忘れシルクロードの時代に埋没していた。
(ブハラ泊)

10月12日(土) 晴れ ブハラからバスにてサマルカンドへ

朝8時バスにて278キロ離れたサマルカンドへ出発する。



大型バスは中国製 ～シルクロードをひた走る

途中、ナヴォイなど砂漠の中のオアシスともいうべき休憩所で3度休憩したが、「マネー」といって金銭を乞う親子にウズベキスタンの現実を見た。

シルクロードを舗装した道路はでこぼこで、観光立国を唱えるなら高速道路などの道路整備やインフラ整備が急務と思われた。だが、バスの窓から見える風景は晴天のもと綿花畑や草原が地平線まで広がり、中央アジアの大地を満喫した。5時間半後の午後1時半ごろサマルカンドの市内に到着した。

市内のレストランで昼食をとったが、パン(ナン)と野菜を豊富に使ったさっぱり系のサラダとひよこ豆のスープ、それにシシカバブというウズベキスタン料理が出た。食事はどこでもサラダとスープと肉料理でしつこさがなく、我々の口にも合い美味であった。

(3)



ウズベキスタン料理

サマルカンドは、シルクロードの中心都市・文化の十字路として、「青の都」、「東方の真珠」と呼ばれており、昼食後、待望のレジスタン広場を見学した。レジスタン広場は、サマルカンドの真ん中に位置し、三つの巨大な建築物(メドレセ)に囲まれている。



レジスタン広場にて

ここで「青」の壮麗な建築物を十分に堪能し、「青の都」をしっかりと確認した。

このころ、日本の東京を含む関東地方が台風19号の猛威にさらされていることを添乗員から知らされ愕然となった。

ホテルへ帰るバスの中で咲耶会(大阪外大同窓会)から参加されていた加来氏が得意のハモニカでロシア民謡などを披露され旅の疲れを癒してくれた。この日の夕食には、ウズベキスタン料理に加えてロシアの影響かボルシチが出た。
(サマルカンド泊)

10月13日(日) 晴れ サマルカンドからバスにてタシケント経由帰国の途へ

午前中は、市内のバザールを見学したあとティムールの墓廟であるシャーヒ・ズインダ廟群を視察・拝礼した。シャーヒ・ズインダ廟群は350段ほどの階段で繋がっており、世界中から老若男女がお参りに訪れて

いた。しかし、この階段によるお墓巡りは高齢者団体には相当厳しいものがあると感じた。

シャーヒ・ズインダは、装飾の多様さ、美しさで中央アジアの屈指の名所といわれる。階段の両側にはティムールゆかりの人たちの11の霊廟が並び、ティムールが愛した姪の廟には「貴重な真珠がここに眠る」と記してある。最奥には7世紀に預言者モハメッドの従兄がここまで遠征して来て、ゾロアスター教徒に殺されたという廟があり、中央アジアのイスラム教徒の



シャーヒ・ズインダ廟群への階段

聖地となっている。この礼拝室に辿り着くと礼拝が始まり、私たち一行は場違いを感じ退出した。



ズインダ廟には世界中から拝礼者達が訪れる

実は上記のサマルカンド・ブルーのタイルが輝くドームや門を持つ建物群は、ソ連邦時代にはイスラム教弾圧で荒廃が進んだという。荒廃した残骸の写真は、建物内の目立たない場所にひっそりと掲示されている。1991年の独立後に復元に着手、今も復元作業が続いているという。



夜空に浮かぶ満月

サマルカンドは、紀元前4世紀のアレクサンダー大王の遠征以前から、シルクロードの中心都市として、興廃を繰り返してきた。サマルカンドは1220年にチンギス・ハーンが徹底的に破壊し、アミール・ティムール(1336~1405年)がティムール王朝(1370~1507年)の都として再建した。

1991年の独立後、ウズベキスタンの求心力として再評価されたティムールはグリ・アミール廟に眠っている。イスラム世界で最大のビビハニム・モスクは夕闇の中に佇んでいた。これら2つの壮大な建築はティムールが存命中に建設された。街の中心であるレジスタン広場の西側に建つ神学校は、孫で学者だったウルグベク王が建て、広場の北には隊商の宿があったという。

いよいよ旅も終盤となり、午後12時20分バスにて出発、311キロ離れたタシケントへ向かった。途中の景色は前日同様雄大なものだった。トイレ休憩を含めて5時間半を要して6時過ぎに市内のレストランに到着する。この間道路は前述のようにデコボコが多くあり、またバスのクッションも日本車ほど良くな(中国製だった)揺さぶられて疲労した。レストランでの夕食はウズベキスタンにおける最後の晩餐となった。この夕食の場にて、石原代表並びに咲耶会加来さんからご挨拶をいただき、解団式とした。急ぎバスにて空港へ。夜9時20分発の大韓航空に乗り込む。

(機中泊)

10月14日(月) 帰国

大韓航空は運行が極めて正確で、定刻の午前7時45分韓国インチョン空港着。10時10分に同空港を出発し午後の12時30分、まさに定刻に成田空港に着いた。成田は雨、ウズベキスタン滞在中はずっと雲一つない晴天続きでカラッとしており気候の違いを肌で感じた。一行は台風19号の被害を心配しながら名残惜しくも帰途に着いた。

<完>

(4) ※この「訪問記」は、蓮見幸輝氏(E1966)のご協力(サマルカンド部分)を得て、新田和夫(M1962)・林義之(F1966)・富山絢子(F1964)が取りまとめたものです。

<ご参考>

参加者の「感想」(女性メイン)

○ (50代女性)

40年越しの願いが叶ってシルクロードの旅ができ、しかも外大諸先輩方のお話もお聞きでき大変充実した旅をさせていただきました。今回、諸先輩方の強靱な体力には感動致しました。私もまだまだいける、と希望が湧いてきたところです。

○ (70代女性)

この度はお蔭様で高校生の時から憧れていたシルクロードの街を訪ねるチャンスをいただき、またいろいろとお世話になりました、心より御礼を申し上げます。雲一つない真っ青な空を背景にサマルカンドブルーのみごとなモスクやミナレット・・・あの美しさは一生忘れられないことと思います。

7日間一緒に出来まして、ステキな思い出がまた増えました!!

ウズベキスタン旅行のご計画から旅行中のみなさまへの行き届いたご配慮まで心より感謝いたします。少し強行軍でしたが、5日間でしたので何とか元気にすごせました。

井上靖の「敦煌」を読んで以来の夢が何十年ぶりかでやっとかないました! NHKの番組でますます興味を感じたシルクロードの街、、いろいろと尽力くださった幹事のみなさまのお陰でこの度やっと訪れることが出来ました。素晴らしい先輩方と有能で勇気のある後輩のみなさまとの出会いにも、感謝いたします。次回の旅行も参加できるように身体を鍛えて体力をつけるように努力したいと思いました。

○ (50代女性)

高校生ぐらいから憧れていたシルクロードへの外語会ツアーを見つけ、「タイムリー!」と飛びつきキャンセル可能性込みで申し込みました。何とか休みを取得して参加に至りましたが、正直なところ想像以上に楽しかったです!

これまで数多くの個人旅行、そして秘境へのツアー旅行をしてきましたが、通常のツアー旅行とも全く異なり、本当に楽しかったです。

行きたかった場所に、大好きな外語の人達と、という最高の組み合わせでした。

ただ、久しぶりのハードスケジュールだったため、翌日会社に行けるのか心配になるほど疲れていましたが、

諸先輩方から元気をもらい、なんとか無事にこなしています。また、いつの日かご一緒できればと思います。

○ (80代男性)

中央アジアは一度も行ったことがなく、中国の西域への出口の蘭州までは30年ほど前会社の仕事で出かけたことがあり、その際一度シルクロードへ行ってみたくと思ったことがありました。今回いいチャンスで健康も回復したので参加しました。これで大体地球の主要箇所はカバーすることができました。

○ (70代女性)

外語会のツアーには何回も参加したのですが、毎回なにかしら印象深いことがあって、いまでも私の心を温かくしてくれます。今回も青いタイルのモスクやミナレットの美しさはもちろんですが、文字通り「寝・食」をともしたAさんとBさんのことが心に残っています。外語の方と関係のないお二人なのですが、ホテルの室内でいろいろ話し合ったAさんからは、ウズベキスタンが「二重内陸国」であることを教えてもらった。「山ガール」であるBさんには、旅装をいかに小さく身軽くするすべを教えてもらったことも忘れられません。

○ (70代女性)

今回のウズベキスタン旅行では何から何までお世話になりました。誘っていただかないといかないところでしたが、ここに染みたものに出会うことができました、ありがとうございました。

ヒヴァの城壁、桑の木の紙のコーラン、目力の強い女たちのお尻のボリューム、ハンサムで知的で優しいガイドのアキバルさん、そして青いタイルで描かれたモスレムの幾何学模様、実物を見たのは初めてでした。

外語大の方達もわたしの日頃付き合う人たちとは違う世界の方達でとても勉強になりました。語学の達人の集団と言葉の通じない国を1週間も旅するなんて! 新鮮な体験です。

(了)